一の橋政策研究会

2024年5月21日

14時30分開催

提案

**１　匿名座談会の進め方について**

　『ところで、「**ほぼ隠居している仲間たち**」であるが、「ほぼ隠居」というのは第一線をはなれた感じであって、ふつうにいえば年金生活者なのである。日ごろ時間をもてあましている感じ、あくまで感じであるが。

　また「仲間たち」というからには、とうぜん初見ではなく、というよりか共通体験があるということで文字通りの仲間たちということである。

　そういう仲間たちが句会をやるわけでもなく、長屋の花見ではないがワイワイガヤガヤと**世相**を肴にまた楽しげに談論風発してみようということである。おそらく平凡のようではあるが、案外思わぬ才覚がひょっこり顕れるといった喜色ハプニングに座がもりあがるかもしれないと予想している。そこでニュース番組などのコメンテーターほどの偽善さをもたず、またお笑い番組のひな壇のような押しこめられ感地でもなく、のびのびと世相評論をやってみようかという目論見をもって、来る五月吉日に某所にて筆者を亭主（座と茶菓子を用意しての司会役）にて開亭の由、その兼日題（兼題）は以下のとおりで、どうであろうか。』（2024年3月20日遅牛早牛「研究会の準備と政局についてのひと言」）

**２　座談会の内容について**

１）「世の中何が問題なのか」がとりあえずのテーマ

　「世の中なにが問題なのか」について、ほぼ隠居している仲間たちとディープ・ディスカッションを計画している。「ディープ・ディスカッション」とは**深掘り妄想**ということでおいおいその姿が見えてくると思う。また、「世の中」とは人それぞれに異なるもので、つまり違って当たり前なのであるから今さらそろえることもないということで、それぞれの勝手を前提での話である。だからすれ違いけっこうといえる。

２）「なにが問題なのか」というのはむつかしい

　さて、「なにが問題なのか」というのはどう考えても痛々しく難解であって、反射的にテーブルに載せちまったのがまちがいであった。で、「問題」とは難儀なことと解するのが一般的であろう。あるいはその時々のテーマということでもある。決していいニュアンスの話ではない。むしろ害をふくんでいるともいえる。また気になる、癪に障るということかもしれない。まあ、そういうことを勝手にいってもらっていいのであるが、勝手といいながらも追随者がいなければ話がつづかないというかたちでしっぺ返しを受けることになるから覚悟していてもらいたい（ウフッ）。

３）具体的な「兼日題（兼題）」について

　かつて「日本維新の会に愛はあるのか？」と勢いで記述してしまったが、今でも興味深い問いかけであったと思っている。「○○に愛はあるのか？」というのはなかなかのフレーズであるから、現に商用的に使われているのであろう。そこで、愛をAIと変換したうえで、「わが国にAIはあるのか？」としてみたが、おちつかないかしら。

　そのまえに、デジタル後進国といわれているわが国のDXについて国会においてもいろいろと議論されていて、とくに行政におけるデジタル化やDXの導入がおくれているところにスポットライトがあたっているらしい。その典型例が個人番号カードの活用であろう。ここで、個人番号の議論と個人番号カードの議論は区別しておかないと混乱するのであるが、残念ながら現実はすでに混乱しているといえる。こういう問題に対しては「わが国の行政には愛がない」からおこるのであるといった仮説をたてると座はひとしきり盛りあがるであろう。さらに行政を差配している政治について、「わが国の政治に愛はあるのか？」というのも相当な発展が期待できそうである。

４）「？」

　それでも堅すぎると思われるのであれば原題にかえり「ロシアに愛はあるのか」とがぜん間口をひろげてもいいし、○○にEUでも国連でもパレスチナでもガザとかを入れてもいい。といってもそれでは堅く凄惨になりすぎであるから、思いきって「ハリウッドに愛はあるのか？」と転向したいが、そうなると俗々（ぞくぞく）しい話題であるから艶やかな方向へ発散することまちがいなしであろう。

５）「マルハラを打破しよう」やはりSNS文化について問わなければ

　さて、SNSでは句読点である「。」が強圧的だから使わないというのが若い人たちの風潮のようである。だからメッセージ内に「。」を使うと、嫌われるらしいという。といって恐れおののいている（すこし大げさだが）おばさんやおじさんがいるという。

　そこで、「SNSが怖くないか？」あるいは「。を嫌う人たちへのSNSってどうよ」なんてのも兼題としたい。さらに、災害などにかこつけてフェイクまがいの情報を稼ぎのためにばらまいて、切実な状況にある人々を困惑させている現状について、鉄槌を下すべきかあるいは放置すべきか、昭和人間としては悩ましいところであるが、ひと言まとめられるかどうか。ともかく便利そうだけど「いらないねー」ということになるのかしら。

６）「私は○○を改善しました」でひと言どうぞ

　つぎの兼題は、官製処方である「働き方改革」でいう働き方について、他律的な働かされ方という理解にたちながら、働かせる立場の使用者、経営者の創意工夫を考えてみようということで、業務命令の本旨にもどって使用者責任をふまえ「私は○○を改善しました」シリーズを考えてみる。

　とくに、○○には「賃上げでやる気」や「コミュ係をつくり風通し」などが入るが、これではまじめ過ぎでまた陳腐であろう。であるならば、ぎゃくに「○○をやって業績急降下になった」という方が分かりやすいかもしれない。たとえば「パラハラ」とか「腰ぎんちゃくを専務にすえる情実人事」とか、しかし結構むつかしいかもしれない。

７）過年齢症候群かしら？

　といいつつ、「自分へのご褒美として」まいにちコンビニのケーキを食うなといった乱暴な意見について、「本来カラスの勝手であるべきことにいちいち口だすな」という基本線を守りながらも、いいわけがましく「ご褒美」などと幼稚園のつづきをやっている幼少性論理展開に不快感をおぼえる過年齢症候群の反応をとりあえず料理するのはいかがというもので、それ以外にも「パリピ」「うぽつ」など無視すればいいのにあえて触ってみるというのも面白そうである。過年齢過反応症候群（？）なんやろね。

８）今年の賃上げは、「満額」の赤い花咲くホワイトボードであった

　今年の賃上げはとても好調のようで、とくに3月13日の集中回答日には「満額」の赤い字がホワイトボードに花が咲くようにならんでいた。なかには要求をこえる回答も少なからずあったようで、もっと高い要求でもよかったのではないかという声もでたようであるが、そのくらい円満な交渉であったということであろう。もちろんこのあとの中小企業における交渉や未組織あるいは非正規領域への波及さらには夏の最低賃金が焦点となるが、雇用労働者全体として実質所得の伸びが年間をとおして確保されるのか、また来年も賃上げができるのかといった点が、これからの政労使の共通課題となっているといえる。

　そこで、兼題として「要求をこえる回答」はありがたいものなのか、それとも迷惑なのか。あるいは「ストライキを忘れた労働組合は見捨てられるのか」とか「なぜ労働組合組織率が下がるのか」といった労働組合論についての議論も面白いのではないか。

９）賃金が市場で決まるというのは本当か？

　さらに、賃上げの一番の推進力が労働市場の需給にあるといわれているが、では労働側として労働力の供給調整が可能であるのかと問われれば否定的になるであろう。とくにエッセンシャルワーカーに関しては、低賃金であるケースも多いと思われるが、そのことについて（賃金が）市場で決まるというのは本当なのかという疑問もあったりして議論が迷走しやすいと思われる。

　社会にとって必要不可欠といわれている仕事ほど低賃金であるともいわれているが、（もちろんそうでないケースも多いのであるが）ふつうに3K（キツイ・汚い・危険）だから高賃金であるとはいえないことは確かであろう。

　妄想かもねと筆者がつねづね思うのは、歴史的に低報酬の仕事はどのように形成されたのかという問いかけと、今日における低賃金労働がどのように形成されたのかという二つの問いかけが、対として俎上にあげられることがもとより意味のないつまりムダなことなのか、あるいは多少近似するところがあるのか、またそうであったとしても、そういった言説の社会的価値について筆者はつまびらかにはできないが、労働市場において決定されるという説には体感的に賛同することができないのである。

　体感的というのは、経験とか体験の蓄積による反応であり、知識を基本に形成される知的反応（リアクション）とはちがうものである。いいかえれば直感的反応であり、結果的に外れることも多い。しかし、いわゆる「腑に落ちない」といった感覚がなぜ生まれるのかという問いかけと親戚のようでもあり、正しい正しくないというよりも理解できるあるいは納得できるといった、あたかも体の中に吸い込まれていく感じに近いものかもしれない。ともかく、理詰めではおよばないもしくは理詰めのすき間を埋める機能であると筆者は考えている。

　すこしまわり道をしたが、「経済学として低賃金労働をどのように考えるのか、あるいは社会学として。さらに政治として哲学するのか、さまざまにいじってみても低賃金は低賃金として微動すらしない、のである。」という兼題もあるかもしれない。

**３　匿名にすること**

　今回の成果物については、学術的なものではなくまた政策提言でもない。ややフランクではあるが、いささかなりとも示唆的なつまりヒントとなりうるものを目指すということである。また、会議録といった発言者の責任を基盤にした性格のものではない、全体的な座談のうちに啓発しながら「なんか役に立ちそうな」何かを生みだしたいのであるから、その趣旨にたてば全体として編集されたものを一体物として扱うのが妥当であると考えている。したがって個々の責任ということではなく、研究会として発表するので、文脈の整理上A、B、C、...で発言の区分けをすることにしたい。

**４　座談後の感想文について**

　普通にいえば、いい足りない、表現が芯を外しているといったことがあってあたりまえであるから、あるいは座談というすばらしく啓発的である座談会の後こそインスパイアされているのであるから、事後の懇親会こそ創造性の炎が最高潮になる時であろう。そういった流れを汲んだ「後日考」あるいは「感想文」を期待している。

以上